

203. 将棋史研究ノート(1) —将棋について思う事—

1. はじめに

最近、日本の各地で将棋の駒が出土しているニュースをよく耳にする。それらは「日本最古の駒出土」であり、「多量の駒出土」であり、また「中将棋などの珍しい駒出土」などがそのほとんどを占めている。将棋が日本に伝えられて少なくとも900年以上の歳月を経ているわけであるが、その起源や伝播経路、そして日本独自の発展を遂げた国内での推移・変遷のあり方など、不明な点が多々見受けられる。

昭和43年(1968)年の福井県一条谷朝倉氏館遺跡で、館跡外濠から多量の将棋の駒が発見された事に端を発して、現在40箇所を越える遺跡での出土が確認されている^①。しかし、その総数約300枚に及ぶ将棋駒の謎を解明すべく研究している人々はわずかに数人にすぎない。この現実が、将棋史の発展を容易ならざしめているように思えてならないのである。そこで、現在までの知見を取りまとめ、私見を加える事によって、将棋の理解と認識を広く世間に問いかけ、今後の研究の糧としたいと考える次第である。

2. 将棋の発生

将棋の発生はインドであるといわれている^②。インドでは神託をうける祭具として使用され、後に盤上遊

戯としてチャトランガと呼ばれた。最初は四人制のサイコロを使うものであった。盤は四角い形をしており、8×8の枡目を持っていた。チャトランガは紀元前3世紀には遊ばれていたものと思われる。駒は王・象・馬・車と歩4つの8個で構成されている。駒は立体的な形をし、それぞれに形を変えて作られていた。これらの駒は、サイコロを振ってそのでた目に関する駒だけが進められるという、双六に似たものであった。それがやがてサイコロを使用しなくなり、四人制が二人制にかわり、敵見方が向き合う現在と同じ形態のものにかわっていった。

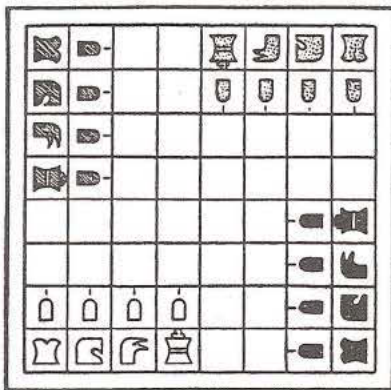
ゲームの競技者はときどき徴用される兵士達であった。そして、彼らの経験も加味されて、王を中心とする競技としての性格を帯びだしたために、駒がそっぽを向いて進むことはゲームとしての面白味に欠けるものがあつたのであろう。四人制を二人制に変えたとき、王の駒が二つになったため一方の駒は副将格に下げられ、その駒は司令官や神官・大僧正と言った扱いになった。その駒がやがてチェスなどの女王の駒になったのである。駒はすべて取り捨てであり、王が詰められるか王だけになると負けとなった。最初、駒には点数が付けられていた。そのことが、チャトランガを博打として発展させる原因となったのである。

3. 将棋の伝播

中国へは起源前後に伝わったという考えと、最古の資料が8世紀にあることから、少なくとも7世紀以前

車	歩			王	象	馬	車
馬	歩			歩	歩	歩	歩
象	歩						
王	歩						
						歩	王
						歩	象
歩	歩	歩	歩			歩	馬
車	馬	象	王			歩	車

インドの四人制チャトランガ(注②より)



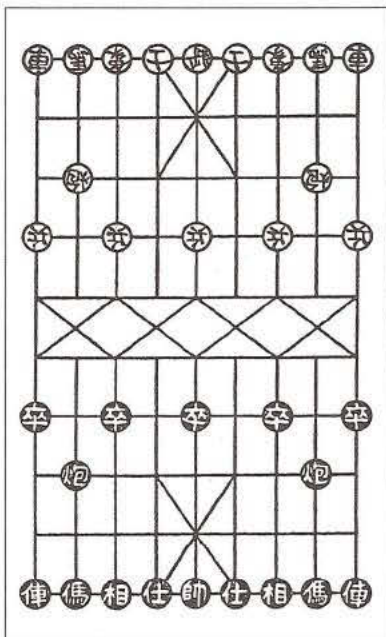
チャトランガの駒の形(注②より)

車	馬	象	王	象	馬	車
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
車	馬	象	王	象	馬	車

インドの二人制チャトランガ(注②より)

に伝来の時期を置く考えに分かれる^⑧。それらはやはり博打としての伝来であった。中国の駒は平たい円筒形をし、上面に文字を書いている。伝来直後は形象的な形態をしていたものと考えられるが、博打としての有効的な利用を考えるならば、作成し易くまた持ち運びに便利な、そして、壊れにくくなおかつ軽い駒が必要とされたことであろう。中国駒の形態はまさにその条件を満たしているといわねばならない。駒の材質は不明であるが、木や石で作られていると考えることは十分に妥当性を帯びている。そして、立体性をなくしたことにより、また駒の方向性や種類を見きわめるために、文字が書かれるようになった。丸い駒であったため、文字は一文字であり、大きさはすべて同じである。駒の種類は、将・師(王将に相当、以下同じ)、士・仕(金将)、象・相(銀将)、馬・馮(桂馬)、車・俚(香車)、兵・卒(歩兵)、そして砲・炮(日本将棋の飛車・角行の位置にある)の七種類となった^⑨。通常、敵と味方で二色に分けられている。伝来当初、盤は8×8の枱目であったが、チャトランガでは枱目を動く駒が象棋では線上を動くようになり、盤の中央に河界ができたために9×10の路となった。

朝鮮半島では丸い駒が八角形のものに変わった。駒の種類は、漢・楚(王将に相当、以下同じ)、士(金将)、象(銀将)、馬(桂馬)、車(香車)、兵・卒(歩兵)、包(飛車・角行の位置)であった。中国将棋と比べ「王」「歩」に相当する駒以外は同じ字で書かれているが、楚の側は字を崩している。駒の大きさは、漢と楚が大きく、士と兵・卒がいちばん小さい。ここでは王にあたる駒、即ち中国象棋の将・師の駒



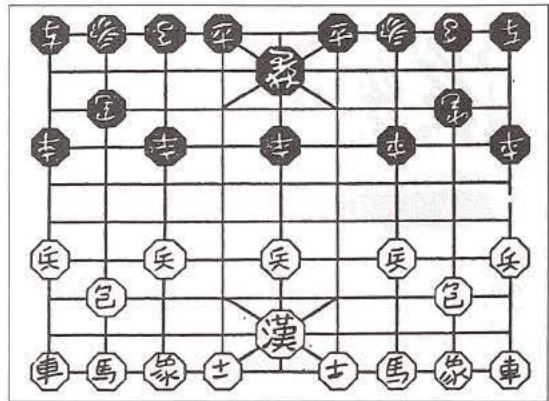
中国の象棋(注⑧より)

車	俚	馮	相	仕	帥	仕	相	馮	俚	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
包	包									包
士	士									士
象	象									象
車	車									車
馬	馬									馬
車	車									車
馬	馬									馬
車	車									車

仮定平安小将棋1(注②より)

車	俚	馮	相	仕	帥	仕	相	馮	俚	車
兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵	兵
包	包									包
士	士									士
象	象									象
車	車									車
馬	馬									馬
車	車									車
馬	馬									馬
車	車									車

仮定平安小将棋2(注②より)



韓国の将棋(注⑧より)

が漢と楚と名称を変化させている。駒は成ることのできないルールである。盤では象棋の河界がなくなったものの同じく9×10の路であった。韓国では将棋と書いて(チャンギ)と発音する。

日本では駒の形が五角形に変わった。平安時代の小将棋では、駒は玉将、金将、銀将、桂馬、香車、歩兵の六種類であったと言われている^⑩。中国や韓国と違って、駒に書かれた文字は2文字になっている。また、象棋の士・仕や象の駒が無くなって、代わりに将の駒が3つになっている。そして、それぞれの頭に玉・金・銀・桂・香・歩などの「佳宝を示す」文字がつけ加えられている^⑪。

飛車、角行はかなり後になって登場している。銀将以下は敵陣に入って成ると金将として扱われた。王将と金将が成れないわけは、象棋の将・師と士・仕が宮城の外へ出られない、即ち敵陣に入って成り込めないことと無関係ではないと思われる。また、象棋の砲の駒に対応する駒が平安将棋には見あたらない。これは、中国で砲の駒ができる前に日本へ伝えられたか、伝来した当時には砲、即ち投石具などの存在していなかった事実があげられる。そのため、砲は欠落したのであろう。前者の通りだとすれば、日本への伝来時期はか

なり早いものになる。

4. 駒の形について

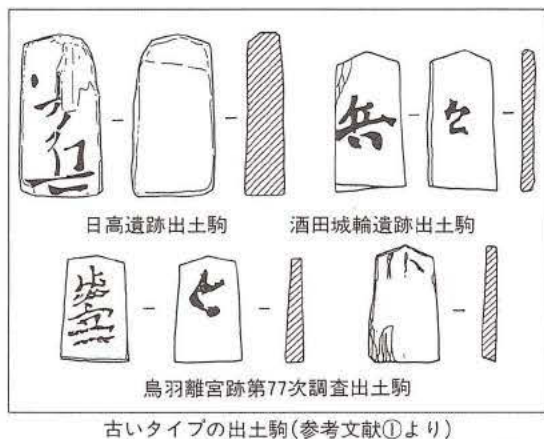
駒の形の由来は不明である。最古の駒とされる兵庫県日高町の平安時代後期（1094～95年）の駒（「歩兵」と書かれ、「日高駒」と呼ばれている）ではやや細長い形をしているが五角形であった。五角形ならば駒の進行方向がわかるが、文字が書いてあれば代用できることである。古い時期の駒は「日高駒」に代表されるように細長い形をしており、頭は鈍角に作られている。これは、当時よく使用されていた木筒の先頭を山形に切った形に類似している事から、駒型の由来をここに置く考えが多い^⑧。確かに伝来の経路として中国～朝鮮半島～日本というルートを考えに入れるならば、丸～五角形と言う変化も間に八角形が入る事によって、形態的な変化は捉えやすくなるように思える。

また、「王」と「歩」に相当する駒以外については、中国象棋では僅かながら異なっているが、韓国の将棋や日本の将棋ではまったく同じ種類の駒である。五角形の由来が前述の様であるとするならば、縦に細長くなった分だけ駒の文字数が増えたと考えられる。ここで、「日高駒」とほぼ同時期と考えられる山形県酒田市の酒田城の輪遺跡出土の駒がヒントを与えてくれる。この駒は表に「兵」と一字のみ書かれ、裏には「々」と書かれている。表の「兵」は象棋・韓国将棋の駒に存在する「兵」と同じ文字である。この駒一つで直ちに断言し難いが、この駒の存在が単なる文字の省略ではなく、中国や朝鮮半島から伝えられて完全に日本化される過程を表している、と捉えることができまいだろうか。

象棋では立像形から文字化される間に、木片に絵の書かれた時期があったものと考えられる。その駒が、北宋（10世紀末～12世紀初頭）の首都開封から出土している。北宋以前の伝来であると仮定すれば、立像形からいきなり五角形に変化することも考え難く、その間に四角形の本片などに文字が書かれた時代があってもよいと思われる。その場合、書かれた文字は一文字であった可能性が高い。

5. 将棋盤について

次に盤についてであるが、中国・韓国の9×10の路に対して9×9の升目となった。中国象棋の盤の升目を数えると、河界を除いて8×8となり、韓国将棋の盤の升目は8×9となる。象棋も河界を数えると8×9であるといえる。日本将棋の9×9とは一見ひと升の違いのようであるが、線から面への利用スペースの変化と駒の種類の変化など、見落とせない点が多々あ



古いタイプの出土駒(参考文献①より)



開封出土の象棋駒(注③木村論文よりコピー)

る^⑨。

路（線）の利用は中国・韓国の将棋のみに現れた変化であり、他はすべて枱目（面）を利用している。これは中国に伝わった時に、当時流行していた囲碁の影響があったものとされる^⑩。それ以前（唐代・7世紀初頭～9世紀末）は、まだ8×8の立像形であった。盤を利用するスペースから考えてみると、日本への伝来時期は中国で枱目を利用していた唐代（7世紀初頭～9世紀末）以前が濃厚となる^⑪。

また、いつ9×9に変化したかと言う事については、明確な事は判っていないが、奈良時代以前に日本へ伝来し、それ以降平安時代にかけて流行したとされる九九と、密接なつながりがあるように思えてならない^⑫。

6. 将棋の日本化について

将棋の駒の名称であるが、将棋が日本へ伝えられた時に駒の名称と動きなどを教えられたはずであるが、それを日本人はどのようにして覚えたのであろうか。

当時の日本人は、異国の船乗りが指す「将棋」を横で見ながら、駒の動きを覚えたのではないだろうか。

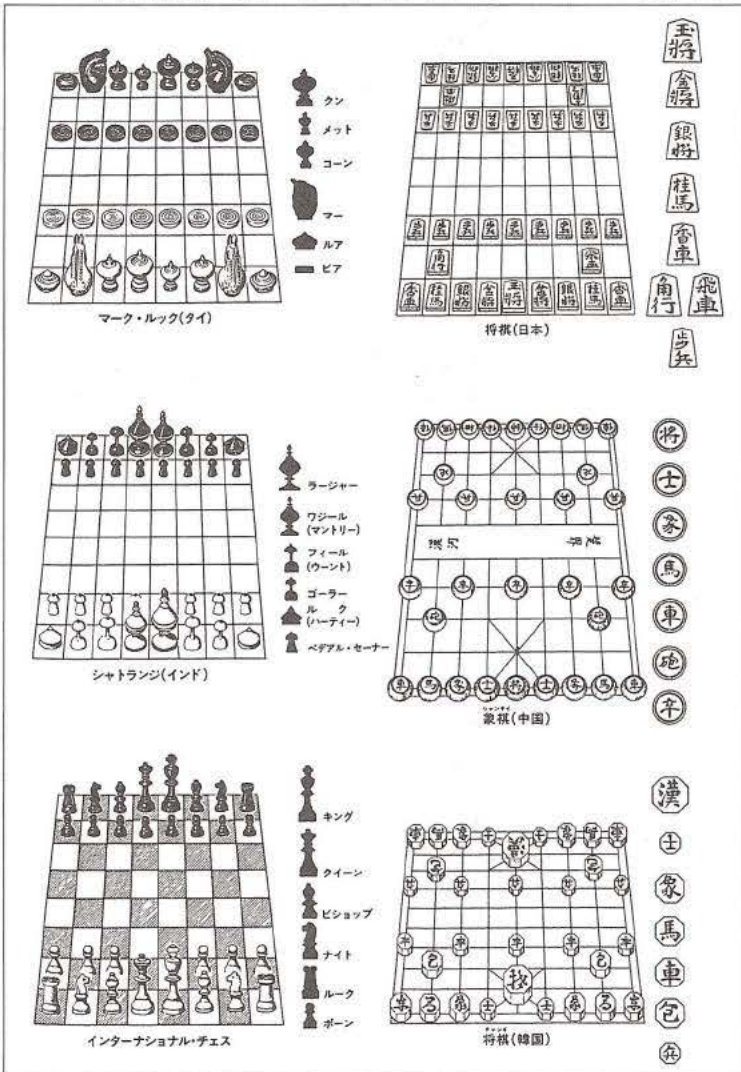
日本人が自分で駒を作る時には、簡単な細工を施した木片などを利用したのであろう。この工作物が五角形になっていくのは、一つは木筒の存在が考えられ、もう一つは中国将棋の駒が平たいものによって変わったことの影響がある。中国或いは朝鮮半島の将棋の駒が平たい木片（即ち、円形或いは八角形）として日本へもたらされた時、日本の将棋の駒も五角形に作られていったであろう。この時期以降に、日本の上層階級が将棋を認識したと考えられる^⑧。

奈良時代の文献には碁や双六の名前はあっても、将棋の名前はまったく出てこない。将棋の名称が記された最古の文献は、11世紀初めの「麒麟抄」である^⑨。そのなかで、藤原行成は将棋の駒の字の書き方を述べて

いる。ここに見られる文章は、将棋と言うものが日本の上層階級の中になりに浸透していることを物語っている。しかし、駒の字の書き方をこと細かく説明する様は、文字化が始まってあまり時間がたっていないようにも思える。

将棋が完全に日本に定着したと考えられる11世紀以降、いわゆる平安将棋と呼ばれる将棋が存在していた。それは飛車も角行もなく、駒は取り捨てであるというものであった。1120年代の終わり頃の書とされる「二中歴」には、将棋駒の動きについて書かれている^⑩。それには王将ではなく玉将となっている事、敵陣三段目に入ると金に成れる事、敵の玉一将だけになると勝ちになる事、また続いて記されている大将棋の玉将の位置が中央に置くように指示してあるにもかかわらず、この将棋（平安小将棋）には玉将の位置は指示して

いない事などがわかる。これらを見ると、当時の盤は中国や韓国と同じ9×10（面の利用で数えると8×9）、もしくはチャトランガやチェス、タイのマークルックと同じ8×8であった可能性が高いと思われる。^⑪そして、持ち駒の使用はまだ始まっていなかった。また「二中歴」の記述によれば、現在の将棋の様な王将と玉将ではなく、玉将のみであったようである。（三宅 弘）



各国の将棋盤と駒(注⑧より)

皇	将	将	王	将	将	皇	
垂	垂	垂	垂	垂	垂	垂	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	
香	桂	銀	玉	金	銀	桂	香

仮定平安小将棋 3